

投動作学習プログラムの開発とその学習効果

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2017-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大矢, 隆二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024377

(課程博士・様式 11)

最終試験の結果の要旨及び審査委員 報告書

学籍番号	30440004	氏 名	大 矢 隆 二
論 文 題 目	投動作学習プログラムの開発とその学習効果		
論文審査結果	合		
最終試験結果	合		
最終試験 審査委員	審査委員長 白畑知彦 委 員 野地恒有 委 員 筒井清次郎 委 員 杉山康司 委 員 新井 凌 委 員		

(最終試験の結果の要旨、1,000 字程度)

最終試験は、約 30 分の研究内容の発表と、その後の約 1 時間の質疑応答によって行われた。

研究内容の発表では、第 1 章から順に説明がされた。第 1 章では、研究対象となった S 市の小学校教師における体育指導の実態を明らかにした。第 2 章では、「初期版学習プログラム」実践の前と後での投距離および動作変容（学習後）の検討が述べられている。第 3 章では、「改訂版学習プログラム」の実践の前と後での投距離および動作変容を検討した。その結果、①基礎的動作の組み合わせによる反復練習と、初速度を高めることの重要性、そして②投動作の習得が、主体的な運動の取り組みを誘発しうることが明らかとなった。第 4 章と第 5 章では、投動作学習を実践する児童の心理的変容について質的方法を用いて検討した。その結果、「得意群」では、「自己効力感の獲得」、「投動作の省察化」、「他の運動への汎化」があることが判明した。「不得意群」では、「学習内容の理解不足」と「自発的行動の不足」のあることが明らかとなった。結章では、研究結果をまとめ、今後の課題について言及している。論文全体を通して、研究の枠組み、分析方法等につき明確に説明した発表であったと評価できる。

続いて質疑応答に移り、5 名の審査委員から次のような質問がされた。

・論文のテーマを投動作に限定した意義は何か。・不得意児の投距離が伸びていないが、それを改善するためはどうすれば良いと考えるか。・第 2 章から第 3 章にかけて、学習プログラムの修正をしているが、その科学的根拠は何か。・指導者に対する「苦手な子への配慮」として、どのような提言ができるか。・学習プログラムに書かれている説明が抽象的過ぎて、小学生が理解できないのではないか。・研究から得られた知見を具体的にどのように教育現場に活かせるのか。・本論文と教科開発学専攻との関連性を教えていただきたい。

これらのどの質問に対しても、的確に回答することができており、自身の研究内容について深い理解があることが確認できた。

以上の点、および、別紙の「審査概評」を合わせて、最終試験の結果は「合格」と判定した。

審査委員長

白畑知彦

